DESIGN WORKS

黒住教、宗忠神社／ロゴマーク、サインデザインなど

シンプルなデザインの正体

── デザインは真髄を伝えるコミュニケーション ──

田中雄一郎／グラフィックデザイナー、ブランディングディレクター

シンプル。辞書で調べれば「単純なさま。簡単なさま。飾りけのないさま。素朴。」とある。日本語に置き換えるとあまりプラスの意味で使われる言葉には思えないのは私だけだろうか。デザインにおいてシンプルといえば、ミッフィーでお馴染みの絵本作家ディック・ブルーナを思い浮かべる人も多いのでは。ブルーナの作品は独自のユーモアと情感が溢れ、温かみのあるデザインであり、決して単純でも飾り気がない訳でもない。むしろ凝縮されていると言え、余分なものを極力削ぎ落とし、最小限の表現の中に強いメッセージ性を秘めていて、機能的で何より美しいと感じる。
一方人間の身体も実に機能的に形成されている。顔に目や鼻口があるのではなく、目や鼻口があるから顔になるのだ。耳、手、足、髪の毛、そしてまつ毛や鼻毛も当然大切な役割があって存在する。もちろん五臓六腑もである。余分な脂肪を除けば新陳代謝はするものの身体に無駄な機能は存在しない。しかも見事なバランスで配置され、進化の過程を経て作り出された神秘的な造形美である。
当然花が美しいのも人間が鑑賞する為ではない。生命にとって共通の営み、遺伝子を後世に残すためである。自家受粉の植物を除き、動物に花粉を運んでもらわなければならない。美しい色や形をしたり、よい香りを出したりして蜂や蝶を惹き付ける必要がある。自然の摂理に無駄はなくまさに機能的だ。だから我々は美しいと感じるのだろう。建築家ルイス・サリヴァンの言う「形は機能に従う」とはこのことか。それらから鑑みるとシンプルとは機能的で必要最小限のフォルムながらメッセージ性が高く、かつ美しいものと定義づけられるのではないか。

A：2016年春に完成した黒住教が運営する納骨殿「神道山 霊苑殿」のロゴマークやサインなどのビジュアルデザイン。マークは黒住教で最も大切な祈りである「日拝」をイメージした「日の出」を表現するとともに、歪みや偏りのない調和のとれた状態であり、双方向の循環が大切であるという、教祖神の御教えである「まること」の精神を表現。また納骨殿であるため、骨壺をイメージし、御霊と共に御心を納める様子を表現するのと同時に、人の魂は天に上り、肉体は土に還るという「魂魄」の様子を表現。上部の半円は「霊地・神道山」をイメージ。カラーの赤は朝日及び日の丸を、茶色は土や大地を表現している。
サイン計画では納骨殿のコンセプトを反映してデザインされたロゴマークを施設のアイデンティティとして、ピクトグラムにも展開した。納骨殿という性質上関係者限定の利用となるため最小限のサインシステムとし、御霊を納めるとともに、心も納められるよう、落ち着いた優しい印象を与えるピクトグラムとした。
また往々にして無機質となりがちな「火気厳禁」や「ご注意」など注意を促すサインにもロゴマークを入れ、そのフォルムからさも施設管理者が微笑みながら利用者に話かけているかのようなイメージを与える、いわゆるインタラクティブなコミュニケーションとしても機能すればと願っている。
B：宗忠神社奉賛会のロゴマークとパンフレットなどのデザイン。マークのフォルムは神社の社・切妻屋根をモチーフに、奉賛会とは「人」と「人」が支え合う会であること、また「奉賛会」という各文字は「人」というフォルムが軸となり形成されていることから「人」と表現した。
C：ありがとうございます運動とは、「一口一日十円献金」という活動が元となり、日々の感謝の誠を捧げ、我も人も生かしてご神恩に報い奉り、もって社会に寄与しようとする黒住教の社会活動の一つである。先述の「まること」の精神を表現するとともに、小さな「丸」の集まりが大きな「丸」を形成する、つまり小さなたくさんの「ありがとう」の積み重ねが、大きな「ありがとう」に結びつく様子を表現した。

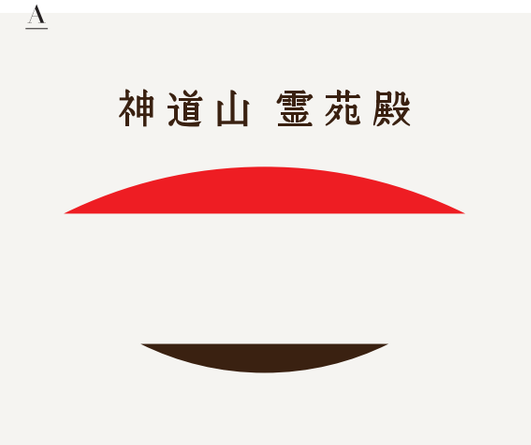
「加える代わりに、削ぎ落としてゆくことは、物事の核心をつくことであり、その真髄を伝えることである」とイタリアのグラフィックデザイナー、ブルーノ・ムナーリは言っている。デザイナーが自己表現としてデザインを加えて行けば行くほど、その物の真髄が見えづらくなる。デザイナーが敢えて「作品性」と謳うならば、無駄なものを削ぎ落とし機能的で最小限のフォルムながらメッセージ性が強く、どう美しく表現するかに注力すべきであり、そこから生まれるデザインこそが「作品」と呼ぶに相応しいと考える。ある記事で是枝監督が「映画は自己表現ではなく、コミュニケーションだ」と言っていたが、デザインも同じでデザイナーの自己表現ではなく、物事の核心をシンプルに表現し、その真髄を伝えるコミュニケーションでなければならない。

AD・D／田中雄一郎　プランナー／蜂谷真一（株式会社荒木組）

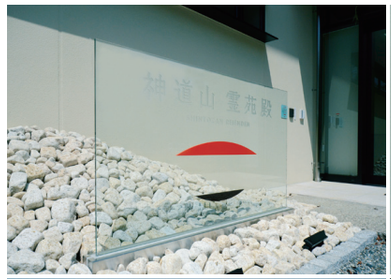
田中雄一郎／Yuichiro Tanaka　www.quadesign-style.com
QUA DESIGN style（クオデザインスタイル）代表

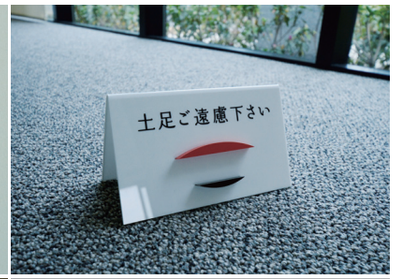
1975年岡山市生まれ。立命館大学理工学部卒業後、都市計画コンサルタントを経て、2004年妻・園子とともにQUA DESIGN style設立。同時にデザインを独学。現在岡山を拠点に活動し、教育・医療機関、公共施設、美術展、交通、建築・建設、農業、アパレル、町など様々な分野のブランディングを手掛ける。主な仕事に岡山大学シンボルデザイン、倉敷市立短期大学ロゴマーク、福武教育文化振興財団CI、ルネスホールVI、宇野バス、岡山後楽園バスVI、まび記念病院、倉敷紀念病院HI、出石町VI、野の花農園プロモーションなど。東京TDC賞PrizeNominee、JAGDA賞ノミネートなど。共著に「ロゴデザインの現場−事例で学ぶデザイン技法としてのブランディング」（MdNコーポレーション）

A



建築設計・施工／株式会社 荒木組　サイン施工／株式会社 オカカン





B

C